



水戸の梅まつり・日本三名園の偕楽園

水戸市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接なつながりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県水戸市です。水戸営業部長が水戸市長 高橋靖氏にお話を伺いました。

水戸市は「筑波経済月報」第18号(2015年1月)第18回本コーナーにて紹介させていただきました。改めまして、本市の魅力や特徴、展望についてお聞かせください。

■伝統文化を尊重した新しい感覚によるまちづくり

本市の産業構造をみると、飲食店や宿泊施設などの第3次産業が全体の86%以上を占め、多くの人を受け入れる体制が整っていることが特徴的です。そのため、この特性を生かし、観光振興に力を入れ、人が集まるまちづくりを目指したいと考えています。

その一つに、毎年2月中旬から3月下旬まで開催する「水戸の梅まつり」があります。その歴史は120年と長く、知名度もありますが、残念ながら多くの若者を誘客するには至っていません。

そのため、平成28年から、梅まつり実行委員会と徳川ミュージアムが連携して、若い女性を中心に人気を博しているアニメ「刀剣乱舞-花丸-」¹とのコラボイベントを開催しています。翌平成29年からはJR東日本水戸支社とも連携し、イベ



水戸市長
高橋 靖氏



水戸営業部長
原 規之

ント内容の深化を図っています。このイベントは毎年好評で、現在では梅まつりの集客の一翼を担うまでに成長し、従来の歴史と自然だけのイメージから一歩進んだ成功例の一つになったと自負しています。

大洗町を舞台にしたアニメ「ガールズ&パンツァー」がまち全体で受け入れられているように、本市も固定観念に縛られず、時代のニーズを捉えたまちづくりが必要です。このような取組はまだ発展途上ではありますが、古きよき伝統文化を大切にする人たちからも新しい感覚が認知されるようになってきたことは、本市が変わるきっかけの一つになると感じています。

■日本一の「ふるさと神輿」で魅力を発信

本市は、明治22年4月、日本で最初に市制を施行した全国31市の一つであり、来年、市制施行130周年を迎えます。この節目の年を契機に、「水戸黄門まつり」をリニューアルする予定です。

黄門まつりは、昭和36年に「水戸の七夕黄門まつり」として始まり、毎年8月の第1金曜日から日曜日までの3日間にわたって開催されています。約5,000発の花火が夜空を彩る千波湖花火大会に始まり、山車巡行、神輿渡御、水戸黄門パレードなどが市内各所で行われ、毎年100万人近くの来場者でにぎわいます。



千波湖畔から望む偕楽園と千波湖大噴水の夜景

これまでは、本市の夏を代表するまつりとして市民が主体的に盛り上げてきましたが、今後は交流人口の増加を目標に、“市民まつり”から“観光まつり”への転換を目指しています。その一環として、現在、地域のシンボルとなる「ふるさと神輿」を製作しています。台輪約1.5m、高さ約2.3m、担ぎ手150～200人を想定する日本最大級の大神輿で、まさしくまつりの目玉となるものです。

本市の「水戸神輿連合会」は、全国各地のまつりなどで幅広く活動することで、確固たる地位を築いています。そのため、本市は神輿の活動が盛んな地域となっていますが、このふるさと神輿で、黄門まつりがより一層迫力のあるまつりへと進化していけると考えています。

また、今年も広く一般の方に神輿の担ぎ手を募集しました。誰でも気軽に神輿を担ぐことができる「参加型」へと変革させたことで、外国人観光客や若者の誘客を図っており、今後はさらなる取組も考えています。

例えば、外国人観光客が徳川家の家紋である「葵の御紋」入りの半纏を着て、大神輿を担いでいる写真に「日本一」、「水戸市」などのハッシュタグをつけてSNSに投稿してもらえば、世界中に発信できるプロモーションとなり、これほど効果的なものはありません。

梅まつりや黄門まつりには、先人たちが努力によって築き上げてきた伝統があります。私たちはそれを尊重しつつも、外国人観光客や若者を呼び込むために、本市でしか味わえない「コトづくり」を仕掛ける必要があります。

本市の若者は、コトづくりの最初の芽を生み出す力を持っています。この小さな芽を潰さず、大切に育てていく文化が根付けば、さらなる魅力向上につながると思います。

■新たな拠点を利用した事業の展開

現在、本市では、旧水戸城の「大手門」や「二の丸角櫓^{すみやぐら}」の復元作業を進めており、完了すれば、三の丸エリアの歴史景観に新たな交流の拠点が生まれます。この復元は長い間、市民が待ち望んでいたものであり、今後はこれを活用した様々な事業を展開していく予定です。

例えば、白壁塀のある街並みを眺めながら、着物姿で「水戸学の道」と愛称を付けた周遊コースをゆっくりと巡れば、昔の雰囲気味わうことができます。また、水戸東武館での武道体験を企画することで、本市の歴史を体感してもらうこともできると思います。

水戸城周辺の整備に加え、日本遺産に認定された弘道館や偕楽園を生かし、観光地として成熟したまちづくりを進めたいと考えています。



大手門完成イメージ

しかし、現在のまちの成熟度を顧みると、新しい発想による取組が必要なことがわかります。そのため、本市でなければ食べられないもの、得られないもの、経験できないものを作り上げたいと考えています。

今は始まったばかりでも、20年、30年の時が経ち、子どもや孫の世代になる頃には、一つの伝統文化として根付いていると思います。種を蒔かなければ芽は出ません。次の世代に課題を先送りせず、今から新しい取組を始めるべきだと考えています。



二中見晴らし台の白壁

■安全・安心な暮らしを実現

これまで観光誘客に向けた取組について話してきましたが、市民が本市での暮らしに、安心と魅力を感じられなければ、市外の人たちの目に魅力的に映るわけがありません。まちの魅力度を高めることは、観光地としての発展だけでなく、移住や定住の促進にもつながります。

そのため、市民が安心を肌で感じられる施策として、子育て支援や教育・医療・介護分野について、これまで以上の充実を図っていききたいと考えています。

これまで、子育て支援策として、待機児童の解消を目指し、集中的に取組んだ結果、待機児童ゼロが達成されつつあります。

次に重点的に取組むべきことは「開放学級」です。本市では、就労などで保護者不在の家庭の児童に対し、放課後、小学校内に開放学級を開設しています。また、これまでは、小学校3年生までの児童を対象としていましたが、受け入れが可能な小学校では6年生まで広げました。

開放学級を利用する子どもたちは、長い時間を

学校で過ごすことになります。人間形成は各家庭のアイデンティティのもとで育まれるのが一番ですが、核家族化や共働き家庭が増加する中では、私たちが子どもたちの健全育成の一端を担う必要があります。その際に大切なことは、一律に育てるのではなく、一人一人と向き合い、個性を伸ばして自主性、自立性を磨き上げることです。

そのためには、施設の整備とともに、指導員の確保など、ハード・ソフト両面から取組む必要があります。

■安定的な医療提供を目指して

医療ニーズが複雑・多様化していく中、急性期、回復期、慢性期などの患者の状態にあわせた医療を提供できるようにするため、体制の見直しが非常に重要だと考えています。

例えば、急性期の病床が余っているにもかかわらず、慢性期、回復期の病床が不足する事態に陥れば、医療難民を生み出すことになり、市民は不安を感じてしまいます。幸いにも、本市には公的病院が4施設あります。現在、これらの病院と協議を重ね、それぞれの役割分担を明確にしながら連携した医療提供をお願いしています。

また、不足している医師の確保に向け、小児科、産婦人科、救急科の医師を目指す方を対象とした「医師修学資金貸与制度」²を創設するなど様々な対策を進めています。

身近に健康や命を守る医療機関があることは、市民が「住み続けたい」と思える最大のまちの魅力です。今後も必要な時に適切な医療が受けられる医療提供体制の充実に努めていきます。

■筑波銀行に期待すること

地域企業に対して、財務支援はもとより、豊富なアイデアを生かし、コンサルティングでのご支援をいただきたいと思います。また、行政運営面では、「あゆみ杯」をはじめとした青少年の健全育成や地域福祉の向上など、幅広い分野において、筑波銀行が持っているネットワークを活用し、より一層の社会活動へのご協力をお願いいたします。

取材日：平成30年9月3日

写真提供：水戸市

2. 医師国家試験に合格し、臨床研修を修了した後、貸与を受けた期間と同じ期間、小児科、産婦人科、救急科の医師として水戸市内の医療機関に勤務すると、修学資金の返還が免除される制度。